

牧師室から (2023.2.5)

実家の近くに母と同じ教会の方がいて、その教会の週報を毎週届けてくれている。是非は別として、その教会の週報の礼拝の式次第には当日の前奏曲も記載されている。過ぐる1月22日ではJ.S バッハの「アリオート」が奏されたらしい。これはカンタータ156番の最初のシンフォニアである。合奏曲なので、おそらくオルガン用に編曲された楽譜を使ったのか、あるいはオルガニスト自身で編曲をしたのであろう。これはバッハが晩年に顕現後第3主日のために作曲したものである。今年ではその1月22日がそれに当たっていた。

前奏曲の選択には、オルガニストは色々苦慮されていることと思う。当日の聖書箇所、説教題、讃美歌、調性、教会暦などを鑑みて選んでいることであろう。そこでこの度、それに加えてバッハがライプツィヒで毎週のように教会暦に従ってその主日のために作曲していたものを使うのも、一つの選択肢であるのかと考えさせられた。音楽に通じた人ならば、バッハの深淵さを知っておられて敬愛しておられることであろう。しかし、バッハの宗教性や音楽性については比類のないものであることは否めないが、「人間バッハ」が神格化されてはいけないと思うのである。ただ彼は多くの場合、作曲したものの最初や終わりに主を讃える一言を書き添えていた事はよく知られているので、作品の底流には彼の信仰心があったに違いない。

「主よ、あなたが望まれるように、生きるにも死ぬにもあなたのみ旨を私に送ってください。私の願いはいつもあなたのもとにあるのです。主よ、私を朽ちさせないでください。あなたはその恵みでもって私を養ってくださいます。そして更にまたあなたが望まれるように忍耐を与えてください。あなたのみ旨は最上だからです。」(カンタータ156番コラール歌詞私訳)

(鈴木淳一牧師)